

〈今月の紙面〉

- ・「食料・農業知っておきたい話」-156- (2面)
- ・家畜伝染病予防法改正 (3面)
- ・和牛部門で堺坂口畜産優秀賞-全国霜降り牛研究会 (4面)
- ・農場拝見 重松農場(佐賀県) (5面)
- ・乾燥マンゴー皮で暑熱対策-乳量低下を抑制 (6面)
- ・有機農業の継続意向8割越え (7面)
- ・畜産物需給見通し (8面)

開拓情報

発行所
 公益社団法人全国開拓振興協会
 〒102-0093 東京都千代田区平河町1-2-10
 TEL 03-6268-9995
 FAX 03-6268-9996
 ホームページ <https://www.kaitakusya.or.jp>
 全日本開拓者連盟・全開連・全国開拓振興協会共同編集

農業の現状を訴える 開拓三団体が要請活動



農水省への要請活動、中央が広瀬政務官

全日本開拓者連盟は6月10日、農水省に対して、畜産・酪農政策並びに予算に関する要請活動を行った。

菊地委員長をはじめ新津全開連会長、西谷振興協会会長ら開拓中央三団体の役員と、全日本開拓者連盟青年部の大塚副部長ら7名が、農水省の広瀬農林水産大臣政務官に要請書を手渡した。

また、青年部大塚副部長は、「農業は資材コストが上がっても価格に転嫁できないので、将来が見えにくい子供に継いでくれない」と未来への不安を訴えた。

広瀬政務官は「資材流通の目詰まり解消を指導する。また、適正価格で販売できるようにすることは重要だ、未来が見えるような政策に取り組んでいく」と述べた。

連盟・振興協会が総会開催

菊地委員長が再任

全日本開拓者連盟

全日本開拓者連盟の第81回通常総会が6月10日、東京ルポール麹町で開催された。

菊地文夫委員長の開会挨拶(2面)に要旨の後、議事に入り、26年度運動方針は、基本方針として、国内農畜産業を守ること、開拓者農の役員を選任すること、今年任期満了に伴う役員選任があり、総会を主催。

西谷悟郎会長の挨拶後、議事に入り、上程された6つの議案等は全て可決された。

当協会も、任期満了に伴う役員選任の件が上程された。候補者名簿通り決定した。新たに坪幸一氏(岩手花平農協組合長)、立川二郎氏(学識経験者)、上野雅永氏(会員外)が理事に、石原文義氏(香取開拓農協組合長)、高橋孝真氏(ジャパニブ農協組合長)が役員に選任された。



全日本開拓者連盟 第81回通常総会



選任された役員 上：連盟 下：振興協会

新津賢庸(中央) 中央常任委員
 野田頭和義(東北) 中央常任委員
 黒岩 優(九州) 中央常任委員
 西谷悟郎(中央) 中央常任委員
 石原文義(中部) 中央常任委員
 平嶋勝博(九州) 中央常任委員

菊地文夫(関東) 副委員長
 新専務理事に立川氏
 全国開拓振興協会

水田の主な作付け状況 (万ha)

	主食用米	飼料用米	WCS用米
22年産	125.1	14.2	4.8
23年産	124.2	13.4	5.3
24年産	125.9	9.9	5.6
25年産	136.7	4.6	4.9
26年産(1月末時)	136.1	4.1	4.8
26年産(4月末時)	136.3	3.3	4.5
対前年差	▲0.4	▲1.3	▲0.4
対1月末	0.2	▲0.8	▲0.3

(農水省の資料を基に作成)

飼料用米の作付面積が一昨年の1/3に 水田作物の作付意向調査(4月末)

農水省は5月20日、水田作物の作付意向調査(4月末時点)の結果を公表した。主食用米の作付面積は、前年より0.4万ha減少しているものの、前年より1.3万ha増加している。飼料用米の作付面積は、前年より0.8万ha減少している。WCS用米の作付面積は、前年より0.3万ha減少している。

一方、飼料用米は年々作付面積が減少してきており、今回が3.3万haで、前年より1.3万ha減少している。WCS用米も昨年より減少しており、今回が4.5万haで、前年より0.3万ha減少している。

各地域で耕畜連携を図り、飼料用米が増産できるような環境作りが重要となっている。また、飼料用米を生産することで、畜産物(豚肉、鶏肉)の供給が安定化し、畜産物の差別化を図ることができると期待されている。

岩手人の馬への愛「チャグチャグ馬コ」



鬼越蒼前神社から出発する馬コたち。今年は72頭が参加

初夏の岩手を彩る風物詩として「チャグチャグ馬コ」が毎年6月第2土曜日に開催される。

鬼越開拓(滝沢市:岩手花平農協)の麓にある鬼越蒼前神社から、盛岡市街を通って盛岡八幡宮までの14kmを、5時間かけて練り歩く。

農耕馬として働くお札に、端午の節句を休息日として神社にお参りしたことが起源とされる。

色鮮やかな手作りの衣装と700個の鈴を身に付け、子ども達を乗せて晴やかに行進する。

岩手は昔から馬を愛し、「南部曲が家」という人と馬が一緒に暮らす家がある。

が前年実績以下の面積となっている。

畜産にとって、輸入飼料が高止まりする中で、国産米を家畜に給与することで、経営の安定化と畜産物の差別化を図ることができると期待されている。

改正 家畜伝染病予防法が公布

ランピースキン病や豚熱の対応変更

5月15日、家畜伝染病予防法の一部を改正する法案が参議院本会議で可決、成立し、19日に公布された。

24年11月に国内で初めて発生し、福岡県と熊本県で感染が拡大した牛のランピースキン病が、家畜伝染病に追加された。

これまでの届出伝染病から家畜伝染病に格上げされたことにより、有事には、緊急ワクチン接種や殺処分、移動制限等が課される。

豚熱発生時の殺処分に ついても対応が変更され

た(図参照)。これまで農場内で豚熱が発生した場合は、全頭殺処分となっていたが、ワクチン接種済みで症状が認められないものは殺処分の対象外となる。

さらに、豚熱ワクチンの接種を担う獣医師の負担軽減を図るため、都道府県から要請があった場合には、研修を受けて接種技術を有する飼養衛生管理者もワクチン接種を行うことができる特例を措置した。

また、ワクチン接種後から3カ月以内に施行される予定だ。

豚熱発生時の殺処分に ついても対応が変更される

殺処分の範囲 (基本的な考え方)

- <基本的な考え方>
感染の有無にかかわらず、他の農場への伝播リスクとなり得る豚を殺処分
- ① **ワクチン免疫が成立していない豚**
⇒ ワクチン未接種/接種後20日を経過していない/発育不良の豚
- ② **すでに感染している豚**
⇒ 豚熱感染を疑う症状がみられ、PCR陽性となった豚
- ③ その他家畜防疫員が、**豚熱のまん延防止のために殺処分が必要と判断した豚**

農水省の資料を基に作成

秋肥 高度化成(基準)が5%上昇 農

中東情勢緊迫化で輸入尿素14.5%上げ 全

J A全農は5月15日、各農協などに供給する秋肥(6~10月) 価格の引き上げを発表した。中東情勢の緊迫化により、輸入原料価格の国際市況が上昇し、主要品目の尿素

・過石・塩化カリ等がいずれも値上がりとなった。窒素・リン酸・カリを各15%含む基準銘柄の高度化成は、前期(11~5月)と比べて5%値上がりする。

品目別にみると、窒素の尿素(輸入)が同14%、リン酸質の過石が同4%

生乳生産量を上方修正

26年度 生乳・乳製品の需給見通し Jミルク

Jミルクは6月5日、26年度の生乳及び牛乳製品の需給について、26年度の見通しを発表し、回りの見通しを公表し、731万t(前年比1.2%減)となる見込みを表した。

全国の生乳生産量は、1. 都府県では5年連続の向上や1頭あたり乳量の増加を考慮した。

乳用雌牛の頭数については、2歳未満頭数(3月時点)は、北海道・都府県ともに前年を下回る見通し。搾乳牛となる2歳以上頭数は、北海道で前年並みを見込む一方、都府県で約8千頭減少する見通し。

25年度の乳用雌牛出生頭数実績は、北海道は前年より19.8%増の8万3千頭が見込まれる。

表1 26年度生乳生産量の見通し

	生産量(千t)	前年比(%)
北海道	4,277	99.4
都府県	3,033	98.1
全国計	7,310	98.8

表2 26年度牛乳等生産量の見通し

牛乳類	生産量(千kl)	前年比(%)			
			牛乳	学乳	学乳以外
牛乳	3,008	99.1	学乳	331	99.0
			学乳以外	2,677	99.1
小計	3,008	99.1			
加工乳	139	98.1			
成分調整牛乳	179	90.8			
乳飲料	961	98.3			
計	4,288	98.5			
はっ酵乳	1,049	100.3			

水不足の土地から田園地帯へ 秋田県美郷町・千畑開拓



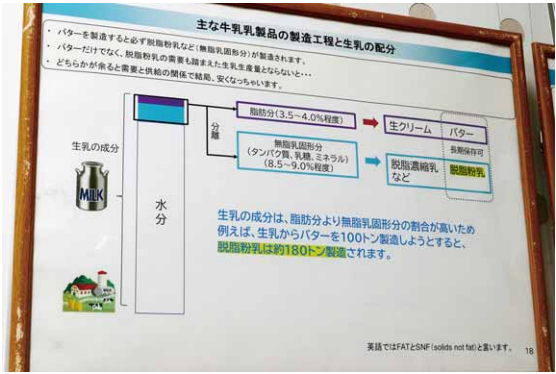
秋田県仙北郡美郷町(旧千畑町)の千畑開拓は、花火で有名な大曲の東に位置する。同地区は標高が100~120mの緩傾斜地な酸性の痩せた土地も見受けられた。

この開拓地は、40年から12戸が入植していたが、戦後の46年からは第二次として111戸が入植した。当初は、雑穀、ジャガイモ、大豆などを栽培したが、なかなか生活できる状況までいかず、出稼ぎ等に出る農家も少なくなかった。

ゼンカイミート(株)
ハラル施設認証
カタール・UAE
バーレーン

開拓組織の動き
7月に予定されている開拓組織の主な行事は次のとおり。
7月 全開連東日本業務担当者会議(青森)
3日 全開連九州地区業務担当者会議(福岡)
3日 全開連九州地区業務担当者会議(福岡)
10日 全国開拓青年部役員会(東京)
24日 ゆうき青森農協畜産共進会

この開拓地の最大の課題は水の確保であった。井戸を掘っても一滴も出なかった。ところが、70年代になると、増産体制から一変、減反政策へと猛烈な逆風が吹いてきた。ここで挫けなかったのが開拓農家であった。56年に、一丈り、地道な努力を積み重ねながら今も歩み続けている。83年に、役目を終えた千畑村開拓農協が解散し、記念に「拓魂碑」が土木公園に建てられた。



㊤：賑わう会場の様子、㊦：パネル展示の内容

和牛部門 (株)坂口畜産優秀賞(長崎) 全国霜降り牛研究会



口清丸紅飼料(株)は5月21日、東京都中央卸売食肉市場で「全国霜降り牛研究会」第23回牛枝肉共

励会を開催した。和牛部門で、長崎県雲仙市の(株)坂口畜産の出品牛(黒毛和種去勢)が優秀賞を受賞した(写真)。
坂口畜産の受賞牛は28・9カ月齢で、種雄牛は「茂晴花」、母の父「喜亀忠」。枝肉重量6555kg、ロース芯面積1511cm²、バラ厚11・5cm、皮下脂肪1・5cm、歩留基準値87・3、BMSNo¹²で、格付けはA5と豊かな肉付きで、優秀な成績を収めた。

スキムミルクの魅力を発信

農水省 消費者の部屋

農水省は6月1〜5日、スキムミルクの試供品を、まで同省北別館1階「消費者の部屋」で、「スキムミルクの魅力をギュウっと! ニュウな世界をのぞいてみよう」と題した展示を行った。

6月2〜4日には、アンケートの回答者限定で、全国の牛乳パックと共通の牛乳を紹介する活動も紹介されていた。

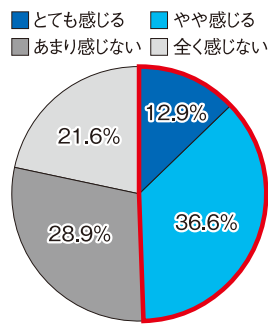
展示や、脱脂粉乳の在庫が積み上がっている仕組みを紹介し、来場者に牛乳・乳製品の消費を呼びかけた。この展示は「牛乳でスマイルプロジェクト」の一環として行われ、プロジェクトメンバーの活動も紹介されていた。

「ミルクリッチ飲料」人気の傾向

ミルクを他飲料で割って飲む

ヒューマン・データ・ラボラトリー(株)は5月26日、ミルクリッチ商品の需要意識に関する調査の結果を発表した。全国の20〜50代の男女1200人を対象に実施した。若者の牛乳離れの実態がある一方で、「ミルクがある一方」、「ミルクリッチ(ミルク多め)の商品を注文する機会が増える」と回答した人が42・7%だった。ミルクを他飲料で割って飲むという質問では、全体では19・7%で「増えている」と回答した。カフェラテ・カフェオレが好まれている結果を公表した。全国の20〜50代の男女1200人を対象に実施した。若者の牛乳離れの実態がある一方で、「ミルクリッチ(ミルク多め)の商品を注文する機会が増える」と回答した人が42・7%だった。ミルクを他飲料で割って飲むという質問では、全体では19・7%で「増えている」と回答した。カフェラテ・カフェオレが好まれている結果を公表した。

「ミルクが主役のラテ商品」に魅力を感じるか?



魅力を感じる 合計: 49.5%

ヒューマン・データ・ラボラトリー(株)の資料から

次世代アスファルト再生技術を発表

農研機構と七王工業(株)は6月3日、「再生可能資源由来の新素材で劣化したアスファルトを再生」する次世代アスファルト再生技術」と題した技術を開発したことを発表した。

アスファルトは重要なインフラ材料だが、原料が石油であるため環境負荷・資源枯渇が危惧されている。また、使用済みの99%以上がリサイクルされているが、再生を繰り返すと品質が低下し硬くもろくなるデメリットがある。

C-AG+劣化アスファルト



柔らかく、曲がる 農研機構の資料から

また、概算だが、日本国内のアスファルト再生に必要なC-AGを賄うことが可能と試算されており、さらに、でんぷんを含む食品廃棄物などからも、C-AGが生産可能とみられている。

石田さんの おいしい! 畜産全開レシピ

今回は、「石田さんのフライパンひとつで簡単ごちそうシリーズの第一弾、暑い夏も食べられるすき焼きのお届けだ。蒸し暑い日が続く季節になりました。スタミナがたく肉と夏野菜を使った簡単なレシピをご紹介します。

- ☆夏野菜のあっさりすき焼き 材料(2人分)
・牛切り落とし肉(すき焼き用) 200g
・さやいんげん 80g
・たまねぎ 1/2コ(100g)
・みょうが 3コ
・焼き豆腐 1/2(150g)
・めんつゆ(市販/ストレートタイプ) カップ2/3
・サラダ油 小さじ1
・みりん 大さじ2
・生卵(お好みで) 2個(付ける用)



栄養コメント



☆牛肉のタンパク質について↓タンパク質は筋肉や臓器などといった体を作るものになるため、疲れた体を修復するためには夏野菜で、日差しや暑さで疲れた体を守ってくれる成分が入っています。良質なタンパク質といえます!

☆旬の野菜について↓ さやいんげんには、皮膚や粘膜の免疫機能を保つβカロテンや、疲労回復に役立つアミノ酸が含まれています!



地域の先駆的役割を担って 佐賀県鹿島市・重松農場

佐賀県鹿島市の七浦第1開拓の重松農場は、重松英利さん(40歳)由美さんご夫妻と、お姉さんが就業している。また、重松夫妻には、沙奈ちゃん、依奈ちゃん、桃奈ちゃんの3姉妹がおり、にぎやかに暮らしている。

祖父の菊雄さんが入植したのが1952年で、56年にはみかん栽培が始まった。70年に父の昇さんが就農し、乳用種肥育もスタートした。76年にはみかん畑1ha、乳用種肥育80頭と、着実に規模を拡大していった。

89年には和牛繁殖牛2頭を導入し、93年にみかん栽培を止めて交雑種80頭、繁殖牛5頭の畜産経営に専念する。2006年に英利さんが20歳で就農し、現在は和牛120頭、繁殖牛30頭、預託牛(経産肥育)40頭、野菜20aと、経営は多岐にわたっている。

現状では、七浦の本場で繁殖と畑作、隣の太良町の2ヵ所(いずれも開拓地)で和牛肥育と預託牛肥育(経産)を行っている。

和牛肥育では、コスト上昇に対応するため、一貫経営の利点を生かし、自家産の子牛は全て自家保留している。



あまり血統にはこだわらず、その牛が持っている能力を最大限に発揮できるような飼養管理を行っている。

また、英利さんは佐賀県開拓畜産事協の理事・肥育牛部会長を務めており、生産者の先頭に立ち生産者全員が経営を継続できるよう、事業の推進に力を注いでいる。組合で肥育された肉牛は「佐賀県産エフワンびより・和牛びより」の銘柄牛として有利販売を目指している。

繁殖牛については、牛の行動監視システム(ファームノート)を活用して、種付けから分娩までの個体管理を徹底している。このシステムを地域でもいち早く取り入れて先駆的役割を果たし、繁殖成績の向上と事故防止に努めている。



上：支え合いながら牧場を営む重松夫妻
左下：繁殖牛の行動監視用首輪、右下：管理が整った肥育牛舎

また、今年から遊休地(みかん畑)だった土地の整備を始め、ここを繁殖牛の放牧地とする計画を進めている。

預託牛は、同じ地域の肉牛仲間から経産肥育を委託され、飼養管理については、本人の技術力を信頼して任されている。

このように、繁殖、肥育、預託、畑など複数の事業を行い、リスク分散を

図り安定した経営を実践している。

複合経営を実践するうえで奥さんの協力は不可欠だが、由美さんも年々牛を見る力や飼養管理技術を習得し、英利さんから全幅の信頼を得ている。

英利さんは「てっぺんを目指すより、今何が経営にとってより良い選択なのかを見極めながら歩んでいきたい」と力強く語ってくれた。

放牧牛の水飲み場誘導路改良 専用出口を設け事故防止

農研機構は、放牧牛の水飲み行動を利用した「放牧牛体重計測システム(以下、システム)」の開発を行ってきた。

このシステムは、水飲み場の前に体重計と誘導路を設置し、首輪装着式の電子タグを用いて、水を飲みに来た牛の体重を自動計測・記録し、遠隔で発育状況を確認できる仕組みとなっている。

しかし、このシステムで用いた直線型誘導路は、入り口と出口が共通で、

牛が退出する際には後退する必要があった。そのため、牛同士の接触や、後方の牛が前方の牛を頭で押すといった攻撃行動が確認されていた。誘導路の破損や個体の負傷につながる場合もあり、安定した体重計測や個体管理の妨げとなるため、攻撃行動を抑える仕組

みが求められていた。

そこで、同機構は、牛が前進して退出できる構造を持つ「斜め分岐型の誘導路」を開発した(図)。従来型の前方部分に約45度の角度で新たな専用出口を設けている。

従来型と新型を比較するため、監視カメラを設置し、牛の行動を記録した。

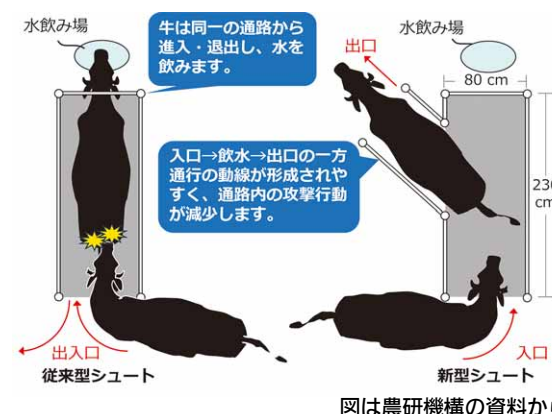
また、体重計測システムを用いて水飲み時の体重を自動記録した。

その結果、1日の1頭当たりの水飲み場の利用回数は、平均1.5回から1.9回に増加し、1回あたりの滞在・飲水時間も2.2分から3.2分に増加した。攻撃行動の発生率は15.5%から7%へと半減した。

このシステムは、公共牧場や放牧を行う肉用牛生産者が、省力的に個体管理を行えるように開発された。大規模

な専用設備を必要とせず、単管パイプ等を用いて設置できる点が特長だ。

同機構は、システムの簡易化と低コスト化を進めるとともに、生産者自らが設置・運用を検討できるよう、構造の考え方や設置上の留意点を整理した手順書の作成を予定している。



低位格付け等級の枝肉が相場上昇率高く 食肉業界の販売動向 日本食肉流通センター

(公財)日本食肉流通センターは6月1日、「食肉業界の販売動向について(26年6月報告)」を公表した。今回は、26年1月からゴールデンウィークまでの食肉販売動向を中心に聞き取りを行った結果を報告している。

【牛肉の販売動向】

国産牛肉は2月以降、和牛や交雑牛、乳去勢牛ともに枝肉相場が高い状況が続く、特に低位の格付け等級のものほど相場上昇率が高かった。

和牛では、スネ、ブリスケなどの低級部位は引き続き需要が強く、モモなどの赤身部位も引きが強い。一方、ロインは、全体としては国内での引きは弱い、余剰で投げ売りが横行するような状況にはならなかった。

交雑牛、乳去勢牛、経産牛も引きの強い状況が続いている。出荷頭数が少なく、枝肉価格が高くなって利益が得られない状況のため、扱い量を減らしているという報告が多くあった。

【豚肉の販売動向】

国産豚肉は、3~4月に枝肉価格が例年以上に高くなったが、牛肉と鶏肉の相場も高かったため、動きは悪くなかったとする報告が多かった。

国産豚肉ではロースの動きが良くないとする一方で、バラ、カタロースはよく動くとする報告が多かった。スペイン産豚肉輸入停止の影響により焼き材が不足し、国産にシフトしているとみられる。

乳用種のための発動続く 牛マルキン4月分

農畜産業振興機構は6月10日、肉用牛肥育経営安定交付金(牛マルキン)の交付金単価(26年4月分、概算払い)を公表した。

乳用種で標準的販売価格が標準的生産費を下回ったため、交付が行われる。

交雑種および肉専用種は発動しなかった。

交付金単価(1頭当たり)は、乳用種は3359.9円(前月は2万8743.3円、確定値)となっている。

前月分と比べ、乳用種は素畜費が増加したが、販売価格がそれを大きく上回って上昇したほか、概算払いのため、交付金は大幅な減額となった。

乾燥マンゴー皮で暑熱対策 乳量低下を抑制

乳牛は高温に弱く、体温上昇に伴う酸化ストレスの亢進によって生産性が大きく低下する。栃木県畜産酪農研究センターは、乾燥マンゴー（ドライフルーツ）製造時に廃棄されるマンゴー皮が抗酸化物質（ポリフェノール）を多く含むことに着目し、これを暑熱期に搾乳牛に給与することによる生産性への影響を調査した。



乾燥マンゴー皮はトップドレスで給与

写真1 TMRにマンゴー皮をトップドレス

◇方法

ホルスタイン種8頭を供試。TMR（同センターで試験牛以外にも給与されている一般的な、配合飼料、トウモロコシサイレージ、イタリアンライグラスサイレージ、補助飼料等を混合したもの）を給与する「対照区」に4頭、TMR+乾燥マンゴー皮（1日1頭当たり500g）を給与する「試験区」に4頭をそれぞれ振り分けた。「試験区」にはマンゴー皮をトップドレスで給与した（写真1、2）。なお、使用した乾燥マンゴー皮は、企業等からエコフィードの残さをもらい受けて給与した。

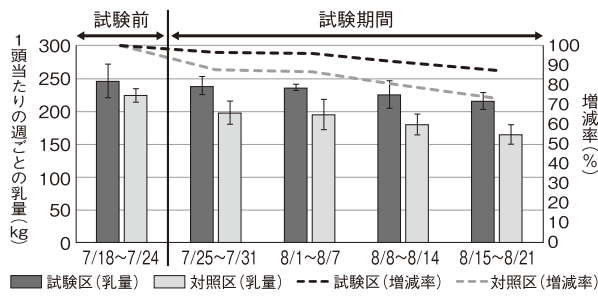


写真2 試験の飼料を食べる牛

ごとの乳量を比べたところ、両区とも暑さで乳量が次第に減少する傾向にあったが、試験区は対照区よりも乳量の減少割合が低く抑えられた。

同センターは、乾燥マンゴー皮が抗酸化物質を多く含むことから、試験区では抗酸化物質が酸化ストレスを抑制し、乳量の減少を抑制できたと考察している。今後、この暑熱対策試験の成果を酪農現場で活用するため、技術普及を推進していくとしている。

図 試験期間中の乳量の推移



写真・図は全て栃木県畜産酪農研究センターの資料から

試験期間は24年7月24日～8月21日とし、試験区と対照区両区で週ごとの血中総コレステロール量・乳量を測定し、暑熱による影響を調査した。

◇結果

血中総コレステロールの値を比べたところ、対照区は右肩下がりで推移したが、試験区は値が比較的一定の範囲に保たれた。このことから、乾燥マンゴー皮の給与により飼料の摂取量が安定したことで、エネルギー摂取量が安定したとみられる。乳量の差は図のとおり。試験区と対照区の週

飼料用 狭畦でも収量確保 倒れにくく安定多収に

北海道でも台風に見舞われる機会が増加していることから、倒伏リスクを避けた飼料用トウモロコシの栽培方法が求められている。道総研は、密植栽培で倒伏リスクを避け、収量も確保できるトウモロコシの栽培体系を考案した。

～背景と目的～

これまでの試験の結果、倒伏リスクを低減できる栽植密度は畦幅75cmで7500本/10a（21年指導参考事項）だった。

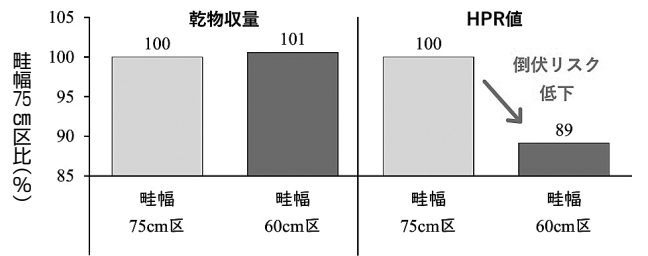
また、19・20年のトウモロコシの栽植密度と倒伏リスクの関係性を調べた試験（畦幅75cm・60cm・45cmの3区を設定）の結果、栽植本数を変えずに倒伏リスクを低減できる狭畦の畦幅は、畦幅60cmと推定。また、他の品種試験でも、倒伏リスクが低減した（図1）。これらの先行試験の結果から、倒伏リスクを高めずに5%以上増収する栽植様式は、「畦幅60cm、栽植密度8700本/10a程度」と推定した。

～実証試験～

先行試験の結果から、「対照区（畦幅75cm・7500本/10a）」、「狭畦密植



図1 品種試験の乾物収量と HPR 値の畦幅75cm区比(%) (RM90日「P8284」)

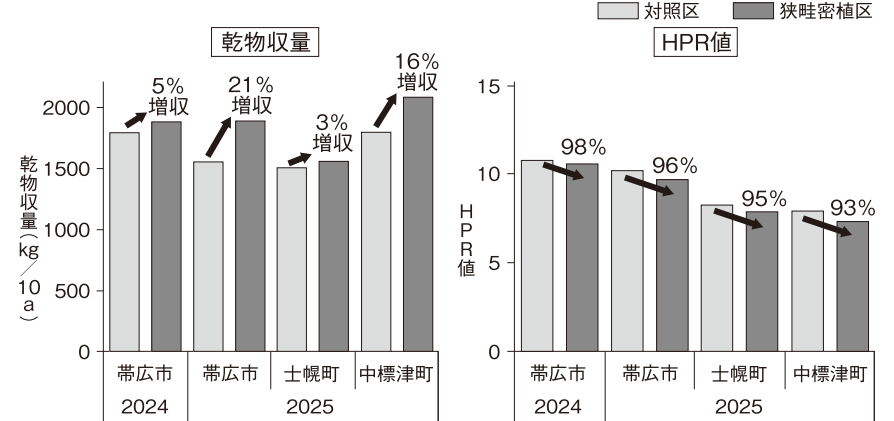


区（畦幅60cm・8700本/10a）」の2区を設定（写真）。測定項目は、乾物収量・HPR値（引倒し法評価値：低いほど倒伏リスクが低い）・播種作業時間（ha/時間）とした。

帯広市で24年と25年の2ヵ年実施した結果と、25年に士幌町・中標津町で実施した結果を比べたところ、いずれも乾物収量は増加し、HPR値は低下した（図2）。一方、播種作業時間が平均26%程度増加した。

同試験場は留意点として、作業時間が増加すること、収量は上がるが種代も増加することを挙げている。

図2 生産ほ場における乾物収量、HPR値(2024-2025年)



写真・図は全て道総研の資料から

繁殖母豚 豚熱ワクチン、経穴に打っても効果同等 接種負担の軽減に向けて

豚熱ワクチンは通常、頸部筋肉内へ接種することが多いが、ワクチン接種は人間にとっても豚にとっても大きな負担となっている。

家畜改良センターによる繁殖豚を用いた先行試験により、豚のお尻の尾根～肛門の間に位置する経穴（人間の鍼灸に使う「ツボ」）である「GV1」の皮下へワクチンを打つと、豚の回避行動が低減されることが明らかになっている。東京都家畜保健衛生所は、「GV1法」での豚熱ワクチン接種の効果検証を目的として、調査を実施した。

～子豚への接種調査～

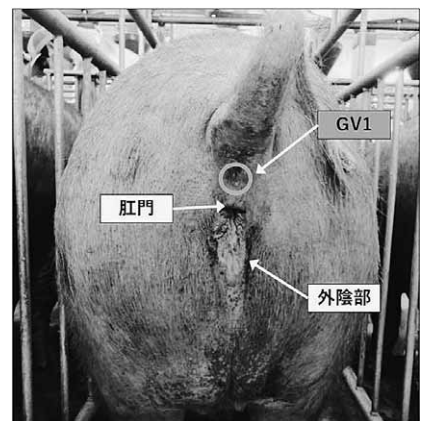
豚熱ワクチン未接種の50～60日齢の子豚43頭を供試。頸部筋肉（豚の首の筋肉）内へ接種する「従来法」区に22頭、GV1皮下に接種する「GV1法」区に21頭をそれぞれ配置した。両区とも保定してワクチンを接種した。血液検査の結果、両区とも中和抗体の上昇がみられ、効果に差はみられなかった。

～繁殖母豚の行動調査～

繁殖母豚27頭を、「従来法」に13頭、「GV1法」に14頭それぞれ振り分け、接種時の行動を調査した。その結果、

GV1法の豚は鳴いたり暴れたりという行動が従来法で接種した豚より少なく、従来法と比べてスムーズに作業が進んだ。

なお、豚熱ワクチンのGV1法では、経穴を短めの注射針を用いて、皮膚に対してなるべく垂直に刺すことで、腸管穿孔（豚の腸を傷付けてしまう状態）を防ぐ必要がある。同衛生所管内の一貫経営農場でも繁殖豚への豚熱ワクチン接種をGV1法に切り替えたところ、農場主からも好評であった。



「GV1」の位置
東京都家畜保健衛生所の資料から

有機農業の継続意向は8割超え 25年度有機農業意向調査

農水省は3月、「25年度有機農業及び有機食品に関する意識・意向調査結果」を公表した。

この調査は、20年農林業センサスで有機農業に取り組んでいると回答した農業経営体(4000経営体)などを対象に、25年11月下旬から12月下旬にかけて、有機農業及び有機食品に関する意識・意向について調査し、調査時点で現在も有機農業を営んでいる1068農業経営体などから回答を得た結果である。

有機農業に取り組んでいる作目は、水稲が51.9%と最も多く、野菜49.2%、果樹26.6%と続き、大豆、麦類、茶、牧草、ソバの順だった。

取り組んでいる年数は、「10～19年」と回答した割合が25.6%と最も高く、次いで「30年以上」が23.4%、「20～29年」が20.1%だった。

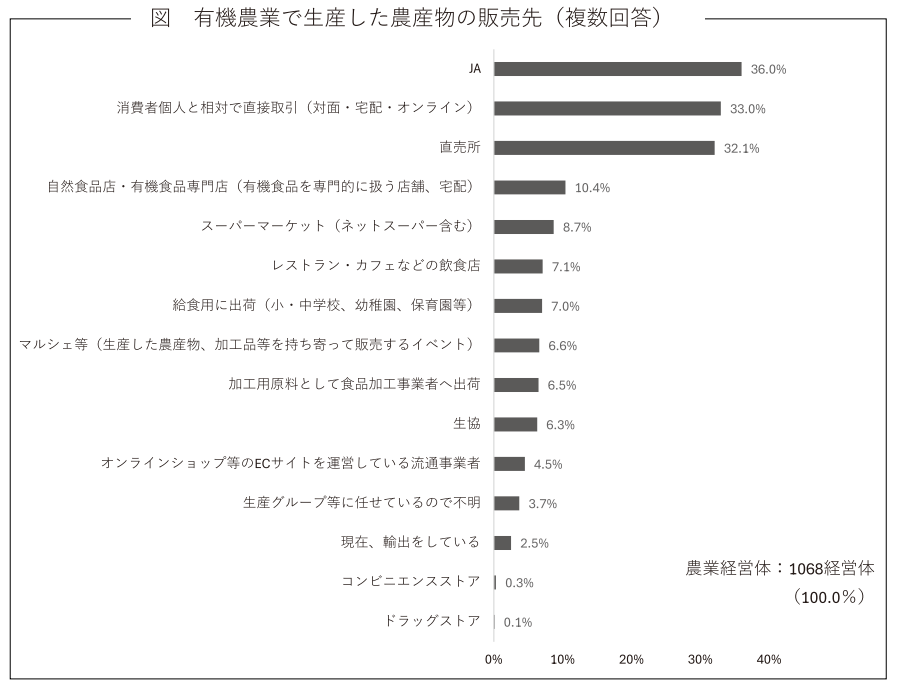
取り組む理由は、「より良い農産物を提供するため」と回答した割合が61.5%と最も高く、次いで「農作業を

行う上での自身の健康のため」が42.5%、「農薬や肥料などの資材コストを削減するため」が34.6%となった。

取り組んでいる認証や他の取り組み等については、「有機JAS認証は取得していないが、栽培期間中は化学肥料及び化学農薬不使用」と回答した割合が31.8%と最も高く、次いで「有機JAS認証は取得していないが、有機JAS認証水準の取り組み」が22%、「有機JAS認証」が16.8%だった。

取り組み規模の今後の意向については、有機農業の取り組み規模を拡大したい意向の経営体は22.3%だった。「現状維持」も含めた、有機農業を継続する意向の経営体は81.8%にものぼる。

今後、取り組み規模を拡大したいと回答した理由は、「よりよい農産物を提供するため」と回答した割合が70.6%と最も高く、次いで「環境負荷低減(温室効果ガスの削減、生物多様性の保全など)のため」が39.9%、「需



要があるため」が39.1%の順だった。

取り組み規模を現状維持、一部縮小または全部やめたいと回答した理由は、「年齢的に有機農業の取り組みを継続することが困難なため」が44.5%と最も高く、次いで「栽培管理に手間がかかるため」が37.5%、「人手が足

りないため」が34.3%と続いた。

生産物の売り先、販売場所や方法は、「JA」と回答した割合が36%と最も高く、次いで「消費者個人と相対で直接取引(対面・宅配・オンライン)」が33%、「直売所」が32.1%だった(図)。

土壌pH調整で斑点米カメムシ抑制 石灰資材施用で農薬使用量低減

斑点米カメムシ(以下、同虫)は、コメの品質や収量の低下を引き起こす害虫で、防除には化学農薬が広く用いられている。しかし、環境への負荷や害虫の薬剤抵抗性の問題から、化学農薬に頼らない防除が求められている。

今回、国立研究開発法人産業技術総合研究所などの研究グループは、土壌pHを調整することで、同虫の成長や繁殖力を制御できることを明らかにした。

多くの害虫は、成長や繁殖に必要な共生細菌(生物の体表などに生息し、栄養の供給や消化の補助などを通して宿主の成長や繁殖に寄与)を保有している。

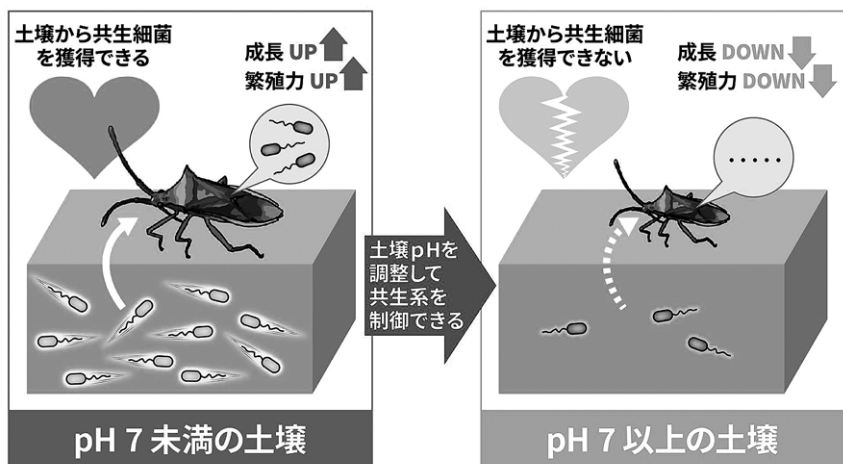
一部のカメムシでは、土壌から共生細菌を獲得することが知られている。そこで、同グループは同虫で室内実験や野外調査を行った。

その結果、中性以上のpHの土壌では、同虫が必要とする「パークホルテリア」という共生細菌の獲得が抑制され、同虫の成長や繁殖力が著しく低下することがわかった。

弱酸性土壌のpHを人為的に中性以上(実験では7、7.5、8に調整)にしても同様の結果となったことから、土壌pHが同虫と共生細菌との共生関係を左右する重要な要素であることが明らかとなった。

土壌pHの調整方法は、石灰資材の施用など、すでに確立されているため、既存の土壌管理の中でそのまま活用できることが大きな利点だ。

同グループは、土壌環境を介して害虫の共生関係を調整するこの手法は、化学農薬の使用量を低減し、環境負荷の低い持続可能な害虫管理技術としての発展が期待されるとしている。



産総研の資料から

病気に強く有機栽培に期待 茶新品種「りんめい」

茶は国ごとに農薬の残留基準値が異なり、EUなどでは、基準値が日本より厳しく設定されている。日本の茶園面積の約70%を占める主要品種「やぶきた」は、炭疽病や輪斑病などの病気に弱く、安定した生産のために化学農薬が多く利用されている。加えて、欧米では渋味を好まない傾向にあるため、これらの問題に対応した新品種の開発が求められていた。

農研機構は、茶の主要病害である炭疽病と輪斑病に強く、農薬使用量を大幅に削減でき、有機栽培にも対応できる茶品種「りんめい」を育成した。

「やぶきた」と比べると、ほぼ同じ中生で、寒さへの強さも同等以上のため、全国の「やぶきた」を栽培する茶

産地に導入できる。育成地における一番茶から三番茶の収量は「やぶきた」の約2.5倍となった。

新芽は鮮やかな濃い緑色で、荒茶の製茶品質も高く、被覆栽培に適している。被覆栽培を行った「りんめい」は、従来の被覆栽培向き品種である「おくみどり」よりも色合いや製茶品質が優れることから、高品質な煎茶、深蒸し茶、かぶせ茶、粉末茶、てん茶の製造に適している。さらに、「りんめい」はタンニンの含量が少なく渋味が弱いため、渋味を好まない欧米の消費者にも受け入れられやすいとみられる。

農研機構は、「りんめい」を導入することで、輸出や有機栽培の拡大につながることを期待されるとしている。

カフェインに貯穀害虫への殺虫効果 節足動物全般に適用期待

岡山大学の研究グループは、昨年、植物由来の天然成分である高濃度のカフェインを飲むとハエが死ぬことを発見した(本紙25年3月号で紹介)。

今回、同グループは、貯穀害虫であるコクヌストモドキを対象に、成虫と幼虫に対し、カフェインを砂糖水に混ぜて飲ませ、寿命、発育速度、蛹化率、体サイズ、摂食量などへの影響を調べた。

その結果、高濃度のカフェイン(1%以上)は、雌雄ともに寿命を短縮させ、発育の遅延や蛹数の減少、体サイズの

縮小を引き起こした。一方、低濃度(0.01%)では蛹数の増加が認められたものの、個体サイズの縮小など、子孫の質の低下が確認された。

今回の結果は、ハエだけではなく、他の分類群である甲虫の害虫でも寿命を短縮させ、発育などに影響を及ぼすことが実証された。

同グループは、カフェインの効果は、広く節足動物に適用できる可能性があり、今後、アリ類など有害な外来昆虫の駆除にも、応用できる可能性があるとしている。

食肉の取扱い割合 牛肉22：豚肉45：鶏肉33

26年度上半期 食肉販売動向調査

(独)農畜産業振興機構(alic)はこのほど、食肉販売動向について、25年度下半期の実績と、26年度上半期の見通しの調査結果を公表した。

25年度下半期の量販店における食肉取扱い割合の実績(重量)は、牛肉が22.4%、豚肉が44.6%、鶏肉が33.0%となった(図1)。24年度下半期と比べて、牛肉が2.8%下がり、豚肉が0.8%、鶏肉が2%それぞれ上がった。

26年度上半期の量販店における食肉販売量見通し(重量)については、25年度下半期との比較で、交雑牛、国産豚肉・鶏肉は「増加」が多かった一方、

輸入牛肉は「減少」が多かった(図2)。また、乳用牛は「同程度」と「減少」が同水準だった。その他の区分では「同程度」が最も多かった。

「増加」と回答した合計が多かったのは、国産豚肉の60.0%と国産鶏肉の80.0%で、その増加割合をみると「5%未満」がそれぞれ最も多かった。

増加理由については、交雑牛が「販促強化」が最も多く、次に「消費者の低価格志向」及び「原料安」となっている。国産豚肉も「販促強化」が最も多く、次に「輸入との需要シフト」となっている。

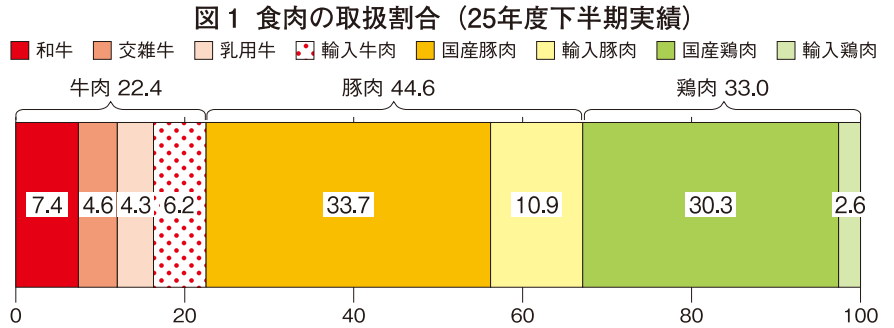
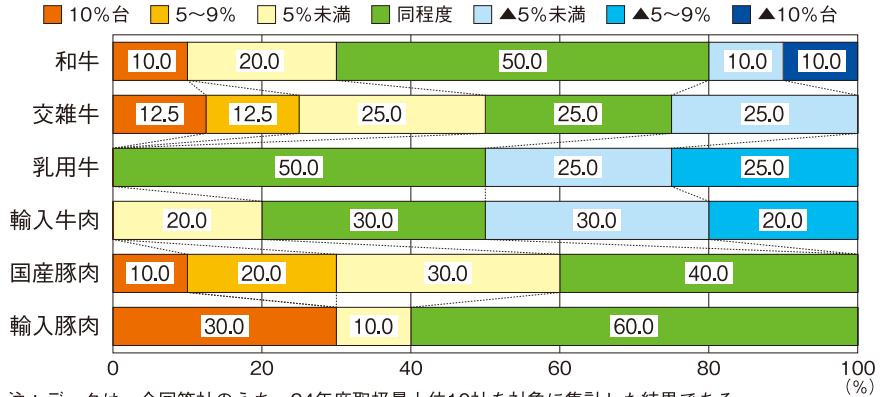


図2 26年度上半期における食肉販売量の増減割合(見通し)(25年度下半期との比較)



注：データは、全回答社のうち、24年度取扱量上位10社を対象に集計した結果である。(alicの資料を基に作成)

牛枝肉

F₁・和牛とも頭数減が続くも、弱もちあい

5月も例年より活発な動きとなっていたが、6月に入ると相場は落ち着いてきた。F₁・和牛は頭数減となるが、弱もちあいに留まるか。

【乳去勢】5月の東京食肉市場の乳牛去勢B2の税込み枝肉平均単価(速報値)は、1353円(前年同月比113%)となり、前月より9円下がった。

6月に入っても、B2で1300円台の動きとなっている。出荷頭数は前年よりやや増加する予測なので、弱もちあいで推移となりそう。

【F₁去勢】5月の東京食肉市場の交雑種去勢の税込み枝肉平均単価は、B4が1905円(同112%)、B3が1872円(同114%)、B2が1803円(同117%)だった。前月に比べ、B4が48円、B

3が64円、B2が74円、それぞれ続伸した。

6月に入ると、B4で1800円台の推移となり動きは落ち着いてきて、弱もちあいの推移となっている。

【和去勢】5月の東京食肉市場の和牛去勢の税込み枝肉平均単価はA5が2710円(同108%)、A4が2547円(同112%)、A3が2470円(同113%)だった。前月に比べ、A5が26円減、A4も12円減、A3は1円上がった。

6月になると、A4で2500円を切る相場となってきたが、頭数は減少傾向にあり、弱もちあいの推移か。

【出荷頭数】6月の出荷頭数は、和牛4万2900頭(同97%)、交雑種1万9600頭(同95%)、乳用種2万3300頭(同112%)と、乳用種以外は減少傾向となっている。

【輸入量】農畜産業振興機構は6月

5月の子牛取引状況 (単位:頭、kg)

ブロック名	品種	頭数		重量		1頭当たり金額		単価/kg	
		当月	前月	当月	前月	当月	前月	当月	前月
北海道	乳去	507	460	306	301	242,095	239,327	791	795
	F ₁ 去	2,073	2,150	348	347	492,914	473,471	1,416	1,364
	和去	2,774	2,527	349	348	876,045	907,783	2,510	2,609
東北	乳去	1	6	236	223	190,300	157,483	806	705
	F ₁ 去	3	1	319	267	358,967	325,600	1,125	1,219
	和去	2,444	2,240	335	329	883,983	908,796	2,639	2,763
関東	乳去	4	42	205	285	70,400	275,681	343	968
	F ₁ 去	78	106	374	356	470,024	482,734	1,257	1,357
	和去	686	893	341	326	919,263	904,253	2,696	2,772
北陸	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F ₁ 去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	-	161	-	294	-	831,272	-	2,827
東海	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F ₁ 去	76	69	341	331	456,022	496,961	1,337	1,501
	和去	414	243	299	279	927,220	911,407	3,105	3,262
近畿	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F ₁ 去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	326	342	265	266	1,061,753	1,136,563	4,007	4,266
中四国	乳去	36	58	311	303	240,931	214,102	776	706
	F ₁ 去	292	248	342	327	508,147	504,346	1,485	1,544
	和去	703	950	328	316	896,770	905,834	2,736	2,866
九州・沖縄	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F ₁ 去	305	293	336	333	543,534	559,089	1,617	1,681
	和去	7,897	7,841	312	309	903,835	913,326	2,898	2,954
全国	乳去	548	566	305	299	240,671	238,572	789	798
	F ₁ 去	2,827	2,889	346	343	498,183	485,656	1,440	1,416
	和去	15,244	13,228	323	320	899,976	916,026	2,786	2,863

注) (独)農畜産業振興機構の公表データを基に本紙集計、当月は暫定値。価格は消費税込み、重量・金額・単価は加重平均。-は上場がなかったことを示す。関東ブロックは山梨県、長野県、静岡県を含む。

の冷蔵・冷凍品の輸入量を総量で4万1200t(同98%)と予測。内訳は、冷蔵品1万2800t(同91%)、冷凍品が2万8400t(同101%)。

向こう1ヵ月の東京食肉市場の税込み枝肉平均単価は、乳去勢B2が1250~1350円、F₁去勢B4が1750~1850円、同B3は1700~1800円、同B2が1650~1750円、和牛去勢A5が2650~2750円、A4が2450~2550円、同A3が2350~2450円での推移か。

豚枝肉

焼肉シーズンに向け、相場は強含みの推移か

5月の東京食肉市場の豚枝肉税込み平均単価は、上物702円(前年同月比107%)、中物は670円(同107%)となった。前月に比べ上物が67円、中物は71円ともに下がった。

4月の相場が高騰しただけに、5月は下落しているが、それでも上・中とも600円台はキープしている。

これから夏の焼肉シーズンへ向かうことから、相場も活発となりそう。

素牛 スモール

乳雄・F₁スモールは、頭数減で高値が続くか

【スモール】5月の全国24市場の1頭当たり税込み平均価格(農畜産業振興機構調べ、月末の取引結果を除く暫定値)は、乳雄が18万3539円(前年同月比176%)、F₁(雄雌含む)は31万4235円(同132%)で、前月に比べ、乳雄は4万8168円、F₁も6万8496円共に続騰した。

乳雄は、これ以上の高騰は肥育農家も導入が困難となるが、頭数増加は見込めず、今後もちあい。F₁は、6月に入っても30万円を超える市場が多い。もうしばらく頭数は少ないと予想されるので、スモール価格も下がりづらい状況となっている。

畜産物需給見通し

農水省の肉豚生産出荷予測によると、6月は131万頭(前年同月比107%)と、やや増加する予測となっている。しかし、今年の夏も猛暑が予想されることから、今後の出荷頭数の状況が注目される。

農畜産業振興機構の需給予測によると、6月の冷蔵・冷凍品の輸入量は総量

で9万1200t(同109%)と、やや増加する見込み。内訳は、冷蔵品3万6300t(同113%)、冷凍品5万4900t(同106%)。冷凍品は、スペイン産の代替えでブラジルなどからの輸入量の上昇が見込まれる。

向こう1ヵ月の東京食肉市場税込み平均枝肉単価は、強含みが見込まれる。上物が700~800円、中物は650~750円での推移か。

【乳素牛】5月の乳素牛の全国1頭当たり税込み平均価格(左表、月末の取引結果を除く暫定値)は、乳去勢が24万671円(同118%)、F₁去勢は49万8183円(同125%)だった。前月に比べ乳去勢は2099円上がり、F₁去勢も1万2527円上がった。

F₁去勢は、枝肉相場が上昇してきているので子牛の引き合いは強く、頭数の増加は見込めない。今後もちあいが予想される。

【和子牛】5月の和子牛去勢の全国1頭当たり税込み平均価格(同)は、89万9976円(同125%)で、前月より1万6050円下がった。前月までの急騰からはやや落ち着いてきたが、上場頭数が少ない状況は続いており、弱もちあいで推移となるか。